

平成二十八年三月期から、新たな三カ年中期経営計画がスタートした第一貨物(本社・山形市)。事務作業のムダ取り・標準化を図る「リアープロジェクト」を完成させたいと武藤幸規社長。到着貨物量の予測システムや到着時間を見える化するシステムも働きをかけていく。一方、品宣面では特に、法令対応の中で生じてきた残荷対策に懸命に取り組む」と話す。

(矢田 健一郎)

武藤 幸規 第一貨物社長に聞く新3カ年中期計画

——前期を振り返って。増加があった。

武藤 特種な事業は売上高六百八十九億円、経常利益は六億九千五百円だった。運賃が安くなった。軽油も値下がりした。物量は前期比で九九・六％と横ばい。ロジスティクス事業では大口得意先の収支改善もあって、これが物流事業全体の収支に寄与した。一方で、十二億十三億円を亦て賞与をほしめとした待遇改善を進めた。

——品宣面では「貨物車」を力メラ撮影して、積み込み作業を指導するなどありとあらゆることをやっています。

——課題もある。

武藤 いま残荷の問題が画で取り組んでいく。

——課題もある。

武藤 三年でやらなくてはいけませんが、残荷対策。出発時間の遅い車を設

けたり、塗上の店所で積み残した荷物を積み合わせた。りする仕組みにしていく。

武藤 だが、PSSもDSTもブラッシュアップや追加投資の必要部分がある。DSTについては、大量の出荷先に対して着時間を予報することが、実際に顧客の業務簡素化につながる。また、当社の側からサービス案内をしていきたい。また運賃もまだ二部是正しなくてはならないし、営業力も強化していく。

——数値目標は。

武藤 三十二年三月期に売上高七百億円、経常利益八億五千万円を計画。これで満足というところではなく、やるべきことをやった上での改善することを目指している。今期は売上高六百九十五億円、経常利益は七億円強、物量は横ばいで計画している。

働き方の改革、推進 残荷対策も力入れる

——効果があった。

武藤 利益を上げることよりも、ドライバーの確保を最優先に考えた。社員数は期末対比で五十人ほどの

——改善を最優先

武藤 三年でやらなくてはいけませんが、残荷対策。出発時間の遅い車を設

——効果があった。

武藤 三年でやらなくてはいけませんが、残荷対策。出発時間の遅い車を設



むとう・ゆきのり=昭和19年3月27日生まれ、72歳。東京都出身。42年度大商卒、プリチストンタイヤ(現・プリチストン)入社、49年退社、太平興業入社、52年第一貨物自動車(現・第一貨物)取締役、59年副社長、太平興業社長、63年第一貨物社長、平成24年ディー・ティー・ホールディングス社長。

し、打痕や段ボールの傷などについて都度写真を撮って発荷主に状況を説明、理解を得る取り組みを行った。運行便の出発前に荷台、後部の写真を撮影し倉庫で

——「前の三カ年では一定の成果を挙げられた」と武藤社長。運賃・取引条件の改善、それを原資にした待遇改善、あるいは採用競争力の強化を進めた。「運賃を上げて利益に回す」とは基本的にもやらない。

——「ただ、持ち越したテーマもある。リアープロジェクトはその二つ。現在の到達点は「五合目」程度。

記者席

一定の成果あり

ドライバー確保のための運賃値上げと同時に、社内の合理化とサービス向上にも手を打ってきた。完成度を高め、さらなるメリットを追求していく。

待遇改善の面では、初任給アップに続き今期、定年を六十五歳に引き上げ、一定年齢からの賃金の減額率も緩和。モチベーション向上に向けた考え、「アベノミクス」じゃないが、社員みんなに頑張ってもら

(矢田 健一郎)